

「全員百点」と 「全員・優」の間で

田鳴 信雄

「高等学校は今」をテーマとする合同研究会が開かれることは前から聞いていた。そこで、大学教員宛にわざわざ特別に作成された案内状をいただいた時、これは出席しようと思いついた。大学の教務委員として今年はずでに何度か高大教務連絡会などで高校の先生方のお話を伺う機会があったし、なによりも、今回は高校生の学力低下を中心とする問題が議論されるらしい。

その後、教育研究所所員の滝沢教授から「合同研究会に参加していただけませんか」とお誘いを受けた時、「実はもう……」と言いかけたら先生は見るからに落胆された。私が「実はもう別の予定が入っています」と断るのだろうと勘違いされたようだ。そこで改めて「実はもう参加する予定にしています」と続けたら、意外だというような顔をされ、その後に嬉しそうな顔をされた。「大学の教員が合同研究会に参加するのは意外なのかしらん」と意外に思ったが、その時は別に意に介さなかった。

当日は一才の娘を保育園に送ってから急いで朝九時の始業に間に合うように高校に向かった。なにせ予め与えられた時間割では九時から授業参観が始まることになっていたのだから。高校に着いた時、二つの事に動揺した。まず、大学教員とほとんど会えなかった。トホホ。そこで、運よく中学の大池先生が通りかかったので御一緒しようかと企んだが、「私はもう行くところがありますよ」という風情でふられてしまった。仕方がない、自分で決めるしかない。私の法学部での担当科目は国際政治史だからということ、2Gの前原先生の世界史の授業を参観することにした。

そこで神妙な顔をして授業を聞いていると、また動揺

した。あとから次々に先生方が入ってくるではないか。「あれあれ、教師が参観に遅刻してきてはまずいよな」と思っている、今度は教室を出ていく先生もいた。そこで初めて「そうか、出入り自由なのか」と合点がいった。合点がいったが、「これでは授業参観をされる側の先生もやりにくからう」とも思った。じつは大学での私の講義は授業中も出入り自由である。別に「出入り自由ですよ」と学生に許可している訳ではないが、真面目に聴講する意志のない学生を教室につかまえておく必要もないので、事実上許可しているに等しい。だが、参観しているのが同僚の教師であつてみれば話が違ふのではないか。

とも考えたが、しかし郷に入れば郷に従え。考えなおし、私も遠慮なくいろいろな教室に出入りすることにした。本代先生の日本史。田中（宏）先生の現代社会。田中（達）先生の古代史研究。国府先生の「組織内行動理論の研究」。大津先生の「表現における女たち」。服部先生の「生活一般」。それぞれの先生の個性ある授業に学ぶところが多かった。気になったのは、教室での生徒の学習態度である。教師がうしろで参観しているのに私語が多い。あ、あいつはガムを噛んでやがるな。あーあ、大幅に遅刻してきたあいつが授業を聴くのはたったの五分

「教室に飲み物を持ち込む」などなど。果ては「教室がさわがしい時には『黙禱』を命じる」とのこと。（ただ、「試験前にはFAXで良いノートが回る」という大川先生の指摘には、率直にいつて、何が悪いのかよく分からなかった）。小学校からは、矢崎先生が「人生で役立つものだけを教え、全員百点満点を目指せないか」と主張された。また、「ノート持ち込み試験にすれば、詰め込み式・点数式の教育の弊害はなくなるのではないか」との問題提起もあった。これには、高校の中村先生がさすがに耐えきれずに「高校は大学受験を控えているからそう簡単にはいかない」、或いは「英単語のように十代のある時期に詰め込まなければならないものもある」という観点から反論された。私も、大学でのノート持ち込み試験が試験場をアナキーと化し実務上問題となっていることを述べてみた。

どうも学校間の交流というのは難しいというのが、余りに陳腐ながら私の印象だった。試験による詰め込みよりも「全員百点」を目指す小学校。大学受験と学力低下の狭間で危機感をもつ高等学校。「出入り自由」の講義ができ、また極端な場合は「全員・優」さえつけられる大学教師。しかし大学の教師とても、さまざまな意味

じやないか。などなど。参観日がこれでは平常の日はどうなるのかといささか心配になった。が、しかしその後、「そういうえば昔高校生の時、オレもよく授業中に早べんを食ったなあ」などと独りごちてしまった。

その後は全体会。配られた資料集は、①高校受験偏差値、②高等学校教員の意識調査、③高校受験生の意識調査、④学園高校の教育に関する父母対象の意識調査（別冊）からなる分厚いものであった。内容的にも重い。基調報告に立った市川先生は、高校は今、学力の面でも生活指導の面でも「危機的」であるとの表現を使われた。網干先生は、統計資料を用いて生徒の成績について説明された。総体として成績が低下しているとともに、多くの科目で生徒の成績が正規分布曲線にならないとのこと。田中（達）先生は、「進学」や「推薦基準」といった言葉が成城教育を歪めているのではないかと問題提起をされる。これらの内容については、しかし、いまこの軽い駄文の中で論評するのは不謹慎というものであろう。

私の家の元の所有者である高校の藤丸先生と昼食時にひとしきり歓談。その後第一分科会（「学科指導の観点から」）に出席。ここでも生徒の学習態度の悪さが話題となる。「教材を持ってこない」「漢字ドリルをやってこない」

で、もはや安閑としてはいられない。

分科会が終わってから懇親会に入る。やれやれ、一日終わったな。ビールでも飲んで元気をつけよう、ということ合同研究会はお開きとなった。

（たじま・のおお 法学部）

